

建築家の

# 往復書簡

原広司 — 磯崎新

4.....

時間は

その都度の機会である

磯崎新様

Hiroshi Hara

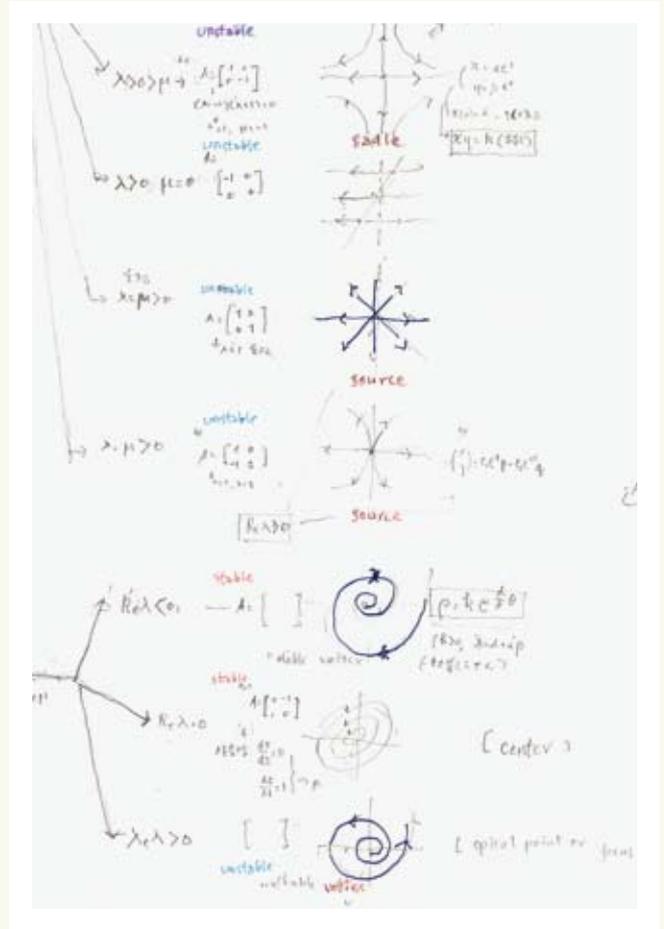
原広司

「時間は想ったときにやってくる」

この前の磯崎さんの書簡の言葉。美事な解釈ですね。「有時庵」の建築の現場つきで。ここでの解釈とは、かく理解するではなく、かくのごとく世界を構築する、との意味において、です。たとえば、「間」についても、そのように解釈しなくてはならないですね。俗に言えば、世阿弥を西欧の流儀

で理解しようとする、時間のひとつの可測性が、浮上しがちである。磯崎さんの文脈に従うなら、時間はその都度の機会であるように思われますし、「間」もその文脈上で捉えなくてはならない。

木村俊彦さんのメモリアルの後、皆でおしかけて、失礼致しました。たしかに、遙か昔の反復、再現のようでもあり



二次元線形ベクトル場—平衡点一覧表(部分)



9011042740

- 北海道支社 Tel.011-330-1710 | Fax.011-370-1717 | 〒065-0008 札幌市東区北8条東10丁目1番1号
- 東北支社 Tel.022-301-9712 | Fax.022-301-9726 | 〒981-0933 仙台市青葉区柏木一丁目2番45号 フォレスト仙台
- 首都圏統括支社 Tel.03-5541-7050 | Fax.03-5541-7129 | 〒104-0032 東京都中央区八丁堀三丁目10番5号 INAX東京ビル
- 関東統括支社 Tel.048-668-1227 | Fax.048-666-7047 | 〒331-0811 さいたま市北区吉野町一丁目23番6号
- 中部統括支社 Tel.052-310-1703 | Fax.052-310-1701 | 〒461-0005 名古屋市中区東横一丁目4番16号
- 北陸支社 Tel.076-264-1710 | Fax.076-264-1755 | 〒920-0025 金沢市駅西本町一丁目15番26号
- 関西統括支社 Tel.06-6539-3500 | Fax.06-6539-3524 | 〒550-0012 大阪市西区新町1丁目7番1号
- 中国支社 Tel.082-850-3917 | Fax.082-850-3920 | 〒731-0113 広島市安佐南区西原六丁目11番8号
- 四国支社 Tel.087-815-3377 | Fax.087-815-3390 | 〒760-0079 高松市松縄町1087番地3
- 九州支社 Tel.092-471-1741 | Fax.092-471-1751 | 〒812-0007 福岡市博多区東比恵二丁目8番16号

●社名・住所の変更は、Faxまたはハガキで、最寄りの支社にご連絡ください。



For Precious Life

カ-RP182

ました。いつも驚かされるのは、磯崎さんのフィジカルな身のまわりは、いつも整っているのですね。それに比して、私の身のまわりは、雑然としている。今でも、アトリエで寝ていることもあって、ゴミの中に住んでいる感じ。丹下先生のお宅に通って先生の論文のお手伝いをしていた頃は、建築家の身のまわりとは、かくも優美なものかと驚かされていました。

「死者とともに生きよ」

木村俊彦さんのメモリアルの話題もあって、私が『集落の教え』で書きました文章を、磯崎さんの文章と並記してみますと、ある呼応関係が成立するように思えます。私の文章は、磯崎さんの文章の特殊なケースでしょうが、momentなる語にも、瞬間と、機会との2つの意味があるのも、語源的に、2つの解釈の重ね合せなのですかね。話が飛んで恐縮ですが、つい先頃、マッド・ラフなるSF的ミステリー作家の『バッド・モンキーズ』を読んでいたところ、「オムネス・ムンダム・ラキムス」——われわれはみな世界をつくる

(訳者、横山啓明の訳文)、原文は We all make the world. この書簡を書きながら、アトリエの人たちにラテン語の検索を

してもらった結果、「世界——ムンダム」が単数 (mundusの語尾変化)と知って、ややがっかり。まあ、ストーリー展開からすれば当然で、秘密結社なら、「われわれはみなひとつの世界をつくる」となるでしょう。私は、ことによると、「われわれは、それぞれに、ひとつの世界をつくる」と書かれているのではないかと期待したのですが。

以前、岩波での勉強会で、井上ひさしが、舞台において、「自在に時間を操る」をめぐって、話をしてくれました。世阿弥も、そうであったように思えます。演劇や文学であれば、巧妙な時間の操りが、フィクションナリテイの基礎になる。大江健三郎の出来事の組み換えも、ひとつの好例でしょう。

建築の場合は、建築をつくることによって出来事を順序だてながら、同時に、出来事のフローを誘起しようと企てます。「有時庵」は、茶室ですから、少なくとも二重の時間すなわち出来事の操作となります。

道元の「有時」の項を、再確認しました。よく知られた美しい表現「山も時なり、海も時なり。」がある項。

先程、機会と書きましたが、磯崎さんの「想ったとき」に

## 原広司 学兄

私が、はじめて「建築」した、と想っていた大分県立図書館を、原さんに批評していただいた文章がありました。ただひとりだけこの建築のことをわかってきている人がいる、これで何だか生きのびれそうだと勇気付けられたのでした。そのとき、原さんは、私が学生の頃、ティエルド・シャルダンの『現

で、都市脳についてのプロジェクトをやらうとして泥沼にはまったのです。そして思考停止。雑学的SFも停止。いっしょに集めていた六〇年代ロックのジャケツも、エリック・クラプトンが「クリーム」をはなれたときに停止。ひたすら零度の思考に徹したいと考えたのですが、今度はもっと大きい騒音に襲われはじめた。内耳の奥が故障していて、「めまい」が起るのです。SFやロックにたよる必要もない。邪魔だと思て、ひも

象としての人間」をよめ、と歩いていたと書かれました。あれは雑学を雑学として読んでいた頃でした。人間の集合意識が百万年後に宇宙脳に変成結実するという奇妙な本でした。カントの世界共和国は、せいぜい現世を想像的空間の範囲で理解するにすぎない。ここでは古生物学を研究

ほうがましか、などという二〇年ぐらい前の感想が、いまだにつづく。原さんが繰り返すSFの新型にはソックアウトされつつけているのです。

雑学的神学については、「めまい」に襲われた頃、いろいろな本を捨てたのですが、「グノシス」と「スーフィー」だけは、あまりに世間が認める気配がないので保存しました。雑学の種類が減りました。いろんな停止をやったときに、実はプラトンからはじめてみようかと思いついたのです。とはいっても先人がすべてこなしてあって私たちのはいり込むスキ間はない。

デミウルゴスという「たわけ」をみつめました(「ティマイオスの

エジプト日本科学技術大学のコンセプトスケッチ



現われる時間とは、道元によれば、時間の全体である。時間とは出来事で、その流れの全体。

磯崎さんの書簡から推測すれば、人間は、時空の自在な横断者である。とすると、「われわれひとりひとり」が世界をつくる「ことになるのではないのでしょうか。ところが、これに歯止めをかけるのは、今も昔も同じで、ゾルダノブルーノは火あぶりにされ、イスラムのスーフィストの僧侶も、神知学の論理的帰結として、「われは、予言者なり」と言て処刑されてきたわけです。

話は、またも飛びます。この間のアレキサンドリアの大学 (Erius) のコンペでは、磯崎さんに敗れました。ユークリッドが、アレキサンドリアの人と知って、小嶋一浩とともに背水の陣を構えたつもりでしたが。

二〇一〇年二月十五日

原広司

Arata Isozaki 磯崎新

し、北京原人の骨をさわっていた人らしく、この時間=生命の論には何だか突き抜けるものがありそうだなと雑学していた頃を想いだしたのです。しかし、こんな論証なしの仮説は、神学の領域のもののように、禅ほど身近にない。私はクラークとブラッドベリーに移行、宇宙脳では手にあまるの

雑学的記述のなかにあります。グノシス派がこれを気にしていたことがわかり、「デミウルゴルフィスム」(造物主義と勝手に造語しました) 論という舌を噛みそうな片語を書きました。SFを忘れてしまっていたのです。「グノシス」は神の他者といっている。日本的な表現では「たわけ」——といえはいい。かつて都市脳といていた構図がウェブ世界が出現したときに崩れたようにみえたのですが、そのウェブのなかでクラウド・コンピューティングが論じられはじめた。あの「たわけ」がやろうとしていたことに近い。あいつは電腦と同じくアホなのです。

馬鹿力だけはあつて、アレクサンドリアにはグノシス派がうろついていた。まだアホがのこっていたら、それをあてにしよう、と思ったのが、昨年の秋のことです。審査の様子を聞くと、貴兄の案が当選することになっていたようです。それなのにこの連中は「たわけ」案をえらんでしまった。場所がアレクサンドリアだったためかもしれません。

まだ「スーフィー」が残っています。貴兄のいうように、こつちとつき合おうと火傷ぐらいはすまない。処刑されるかも知れません。そんなプロジェクトにつき合おうとしています。カラシニコフをもった迷彩服の兵隊が護衛してくれています。この上空にはさらなるバカが飛ばす無人機がうごいている。どうしましょうか。

二〇一〇年二月十八日

磯崎新

はらひろし——建築家一九三三年生まれ。一九六四年、東京大学教務系大学院建築学博士課程修了。一九六九年、東京大学工学部建築学研究所。一九七〇年よりアトリエ建築研究所と設計共同。一九九九年より原広司+アトリエ建築研究所所属。いそざきあらた——建築家一九三二年生まれ。一九六六年、東京大学教務系大学院建築学博士課程修了。一九六三年、磯崎新アトリエ設立。